

# 保育の体験と思索

## ——子どもの世界の探究——(三)

津 守 真

五月十二日



### 視線

Ka子は、はじめ部屋の隅の木の箱の中に座っていた。私が床に腰を下ろして、ブロックをつなげながらKa子の顔を見て、視線が合うと、私の視線をさけて目をそらし、身体をずらして、さらに箱の隅の方にゆく。私はKa子の方を見ないようにして、ブロックの籠をKa子と私との間において、ブロックをつなげる。しばらくすると、Ka子もブロックの籠に手をいれてつないでいる。

ビニールの袋を持ってきた子どもがあり、私に「砂利をいれていい？」というので、私は「いいよ」というと、庭に出てゆく。するとKa子も、その子について出てゆく。私はビニールの袋を渡すと、それに石をいれている。まもなく数人の子どもが、山の方

にゆくとき、「いく？」とたずねると、小さな声で「いく」と言  
って、子どもたちについて去る。

Ka子は、部屋の中で立って見ていることが多かった子どもである。いままで私が傍にいて遊ぼうとしても、身をよけて避けられてしまう。この日も正面から目を向けたら、Ka子は一層私から遠ざかった。視線には力があるようである。そこでなにげないかのように、——横から、間接に、物によってひきつけられるように、また、他の子どもたちの動きをさかんにすることにより——ふれてゆくと、いつのまにか一緒に動けるようになっていく。こういうことは、はじめての子どものふれ合いでは、しばしば経験してきたことである。視線はティンバーゲンが言うように（田口恒夫訳、ティンバーゲン『自閉症・文明社会への動物行動学的アプローチ』新書館一九七六年）その人の圧力を意識させ相手に不安を生じさせるので、人を意識させないようにしながら、自分

の活動を起こさせるようにすることがたいせつなことを、考えさせられた一例である。

#### 袋をわること

私が庭の出入口の階段に座っていると、男児のYとTがビニールの袋を持っていて、それに口をつけて息をいれ、袋の口をねじって持ち、叩いて割っているのに出会う。叩くとかかなり大きな音をたてて、ビニールの袋が破れる。それをくりかえしている。Tはうまく息をいれられなくて、私に息をいれてくれと持ってくるので、吹いて空気をいれてやると、自分でねじって叩く。これが皆に面白いらしく、傍にいた数人の子どもが、ビニールの箱から袋をとり出してきては、息をいれて、パンパンと割っている。これは偶然に子どもが発見した遊びであるが、見方によれば高等な科学遊びである。子どもたちは袋の口をねじってゆき、袋のふくらみを圧してゆく。そしてたたくと大きな音がする。ビニールの袋は、口もとをねじるのがやさしいので、だれにでもできる。息をいれると袋がふくらみ、ふくらんだ部分の容積を小さくしてゆくと見た目にはちぎれるほどになり、それを叩くと袋が割れるという圧力の原理を、行動面で、感覚的に体験しているとも言える。概念的、論理的理解に先立って、こうして自発的に獲得し

た直観的把握が、科学的理解の基礎になっているのだと思う。けれども、それだからと言って、みんなに袋割りを経験させようとして、子どもを一行に並べてやらせたのでは、もはや違うものになってしまう。こういうことは思いがけないときに起こるので、おとなとしては、ビニールの袋をそんなにたくさん使ってはいけないのではないかと消極的な気持ちになりやすい。しかし、こういう偶然の機会に、貴重な体験をしていることが多い。それを見逃さずに、思い切ってやらせてやりたいと思う。

#### 怪獣になること

三歳児の子どもたちは、怪獣やスーパーマンになって暴れることが多い。いまこの文章を書いている九月のある日、幼稚園全体で、朝、登園して間もなく、九時半ころから十一時の降園近くまで、小運動会が行なわれたことがあった。そのための練習というようなことは、このクラスでは一切していないが、この日は、園庭で、遊戯や、球いれ、綱引きなどを、大きい組の子どもたちと一緒にやったり、見物したりして過ごした。その日は、帰りがけに、いつもよりも暴れている子どもが多かったが、降園になって後、数人の子どもたちが、母親が翌日のバザーの準備のために、一時間程度で遊びながら母親を待っていた。その間の主な

遊びは、いつの間にか怪獣ごっこである。子どもたちは、キレンジャー、アカレンジャー、アオレンジャーになって、ジャングルジムの上からとびおりて、私をドラゴンにしてとびかかってくる。他のことは考えられず、自分が超能力を持って力一杯とびかかる。私にとっては、怪獣は、一時のまねごとであるが、子どもにとっては怪獣になった自分が実在しているかのようなものである。私は、Ta、Yu、Sと追いかけたり、追いかけられたり、取っ組み合ったりして、ひとときを楽しんだ。

この怪獣ごっこがはじまると、止まるところがなく暴れることがつづくので、どうしたらよいかと思うことが、このクラスの一学期に何度かあった。子どもにとって、怪獣ごっこは何であるうか。これは興味深い問題であるので、このクラスで私が経験した怪獣ごっこから、幼児と怪獣のことを考えてみたい。

## 五月十九日 雨

この日は朝から雨で、子どもたちは全員室内で遊んでいた。私はいってゆくとすぐに、数人の男の子たちが、私を目かけてブロックを投げたり、げんこつで叩いてきたり、大さわぎになった。私は部屋に入ってすぐのことだったので、その前の様子もわからず、とびかかってくる子どもの相手をしていた。子どもによ

って、とびかかってくる仕方が違う。MくんとNくんは、いちばん力が強く、頭突きやげんこつでとびかかってくると、相当痛い。Sは弱々しくかかってくる。ロボットと自分でも言っているが、自分がロボットにならないければ叩くことができないみたいである。気がつくとも、いつも私の傍にきたことのない女兒のKa子が、小さな声ではつきりと、「マジンガー」と言ってブロックを私の方に差し出している。言葉で怪獣の名前を言う子もあるし、ただ暴れているだけの子どももある。一番強いMくんは、私が一寸強く押えたら、すぐに泣いてしまう。私は床に座って相手をしていて、この日はかなり力一杯かかってくる子どもが多く、いつ果てるともわからず、相当痛かったが、やめにしようと言う気にはなれず、違う活動に持っていっただろうかと思ひ、あるところで私は立ち上がって、絵の道具の出ている机のところにゆき、腰をおろした。

するとすぐに、暴れていた男の子たちはそこに集まってきた。いちばん暴れていたMくんは、マジックで紙の上に手早くぐるぐると、力強くかいた。いま暴れたばかりのエネルギーを、絵としてあらわしたようなものである。すぐにもう一枚と紙を要求するので出してやる。おとなしい子どもたちの何人かは、これを機会に絵をかきはじめるが、暴れていた子どもたちは、力強くぐるぐ

るとかくと、数人の子どもで紙をひっぱりあって、破いてしまった。怪獣になって暴れていた子どもたちは、絵をかくても、それは怪獣になって暴れていたことのつづきである。かくところに興味があるのでなく、引張って破くのも描画の一部である。同様のことが翌週にも起こった。

## 五月二十四日

いつも暴れるMくんとNくんが、庭から入ってきて、私をみつけると、私の後側にまわり、たたいたりぶったりして力一杯かかってくるので、私は立ち上がって相手をする。肩車をしたり前まわしをしたり、相当相手をして、少し途切れた時に、机の上になら半紙を出して、私も少しかきはじめると、みんなどやどやと入ってきて、すぐにかきはじめる。落ち着いてかきはじめる子もいるが、MやNはあまりかかないで、紙をもっとほしがる。その紙を自分のわきのために置いて、なおも紙をほしがる。いままでもこういうことに何度も出会ったが、このようなときには、紙をやりにすぎないようにと、つい小さな気持ちになってしまう。こういうときの子どもにとっては、かくということは、もはやどうでもよいことで、おとなしくかいている子どもにはおとなが優しく見て、この子どもたちには拒否的な眼を向けていることが、根本に

あるのではないかと思う。そのうちにその子どもたちは、サインペンを両手につかんでもってゆくので、私はそれを取り返して箱の中に入れて、なおもひとかかえつかんで、机の下にもぐる。「サインペンは使うだけね」と私が言ったからか、この子どもたちは、さっと立ち去ってしまった。もともと絵をかきはじめたのは私で、子どもたちはそんなに本気でかいていたとはいえず、暴れることのつづきをしていたように思われる。私がもっとこの子どもたちと暴れることの相手をしていたら、事態は違っていたであろう。私が「サインペンは使うだけね」と注意をすれば、私の関係はそこで終りになるのも当然である。(なんと愚かなことを言ったのだろうと思う。幼稚園にいくと、家庭では言わないことを言ってしまうのは何故だろうか。) MaくんとNaくんと私との関係は、この日はここまでで終るが、このことは後にまで尾をひくことになる。そのことは、表題を改めて、後にふれることにする。

ここに述べてきた、暴れること、また怪獣になって暴れることは、単にテレビの怪獣のまねをしているのではないように思われる。この子どもたちの内心には、暴れなければいけない動きがあるのだらうと思う。暴れなければいけない心の動きがあると

きに、それが怪獣という形をとるのではないだろうか。つまり、怪獣の模倣をして怪獣になるのではなく、怪獣のようにめっちゃくちゃに暴れまわる心の動きがあるから、怪獣になるのである。このことは、丁度同じころ、知恵遅れの子どもToにも観察された。

## 五月一日

Toは、怪獣の絵本を切り抜いてもらうことを好む。この日も、母親に、厚紙の絵本からマジンガーをいくつも切り抜いてもらっていた。怪獣の玩具を手を持っていたり、こうして怪獣を切り抜いてもらうのをじっと見ていて、それをいくつも手に持って動きまわることは、この子どもの一日の生活の大きな部分を占めている。まもなく母親が見えないところでも平気になり、すべり台の上からボールを投げる。また、戸棚の高いところにあがって、うれしそうに笑う。Toがこんなにうれしそうな顔をすることは珍らしい。知恵おくれの子どもには、高いところにあがることを好むものがしばしば見られる。ふだんはめられることが少なく、困ったといわれ、これもまだできない、あれもできないといわれて毎日を通している子どもが、おとなの頭よりも高いところにあがって下を見下ろしたときには、はじめて優越感を感じるのではないかと思う。おとなの手の届かない高いところにあがったときの

この子どもたちの明るい表情は、そのことを示しているように思う。

Toが高いところにあがってボールを投げおろし、下を見おろして大声で笑うのは、マジンガーのまねをしてそうしているのではなく、こうして高い所から下界を見おろして大声を出すことが、彼にとってのマジンガーだと考えた方がよいであろう。

三歳児のMくんたちの場合も怪獣になって暴れるとき、止まるところがないかのように暴れつくすのは、この子どもたちが怪獣のまねをしたからそうなのではなくて、この子どもたちが、ある枠をはずれたとき、めっちゃくちゃに暴れまわりたい内心の動きの方が先にあるからと考えた方が、よりよく全体を理解できるように思われる。

この怪獣になって暴れる子どもたちとつき合っていて、顕著なことのひとつは、ちょっと強くころがしたり、どこかにぶつかったりすると、すぐに泣いたり、べそをかいいたりすることである。こういうのを見ると、彼らは本心は弱いのだけれども、怪獣になっていられる時だけ強くなっているのではないかと考えたくなる。実際、この子どもたちは、家庭で、母親の前では、いうことをきく良い子であることが多いらしい。しかし子どもの中には、

自分らしさを發揮して動きまわりたい本性があるので、それはどこかで出ないではないのであろう。母親や教師の前で良い子になっている子どもが、おとなの見ていないところでめちゃくちゃな振舞いをするのがしばしばある。ふだんの生活の枠の規制力が強いほど、自分らしく暴れまわりたい内心の動きは、その枠の外で、原始的な形で出るであろう。このことは、おとなの生活の中でも体験されることである。

現代の子どもが、テレビの怪獣ものに熱中するのは、テレビの怪獣の刺激の強烈さもあるだろうが、それに心をとらえられるだけの生活の地盤がある。都市生活ではとくに、極度に狭い住の間、外に開放的でない閉じた空間が、子どもの生活空間として、生まれたときからあたりまえになりつつある。それに加えて、母親の目がいつも子どもの行動の上に注がれている。階段の下、納戸の隅、物置の裏など、おとなの目からかくれた遊び場もない。そのおとなの目が、すべてを包容する大地の目、春の暖かさの目の目であるならばよいのだが、母親の目が、管理し評価する目となりつつある。いけない、あぶない、もっと上手に、もっと早く、ということが子どもをとりまいて、子ども自身が自分で十分に力を發揮して何かをやりとげることができない。おとなの目には、それがあまりにも小さくつまらないように見えて、子どもに

とって、それがどんなにたいせつなことであるかが見えない。子どもは、こんなに小さいときから、おとなの目に良い子になることにエネルギーを費やしてしまい、自分で周囲の世界を楽しみながら自己充実する生活を持つことができない。それでは、子どもでありながら小さなおとなになってしまう。

この子どもたちが、ふだんの生活の枠からはずれて、怪獣になって暴れるとき、破壊し、ふみつけ、制御なしに力一杯ぶつかり止まるところなくエネルギーが噴出するので、相手をしていて閉口することがしばしばあるけれども、その中に、かえって子どもらしさにあちこちでふれることができるような気がする。そして、彼らが怪獣ごっこをして一時間も遊んだ後のすがすがしい表情は、全く幼児の表情であるのを見て、私もうれしくなる。

怪獣は、ギリシャやエジプト、中国や日本の古代から、空想上の動物として人々の間で信じられていたところを見ると、怪獣な形をした暴力を揮う力は、昔から人々の心の中に根強く存在していたと考えられる。それは人間の内奥にあって、未だ定まった形をもたず渾沌として、明瞭な意識に上らない原始的な衝動のシンボルである。時によっては、それは人間の破壊的側面や、みにくい側面のシンボルである。英雄が怪獣と戦うのは、自分の中にあ

図書紹介

る破壊的側面を意識に上らせることによってコントロールしてゆくようにする戦いであるとも考えられる。このような観点からみるならば、子どもが怪獣ごっこで怪獣と戦うのは、それによって、ふだんは発揮されない自分の力を認識してゆく過程であるともいえる。

また、昔から、怪獣のモチーフが社会に流行する時は、専制君主の悪政の時代か、無能な王国の兆と言われていたという学者もある。その時代考証は別として、現代が幼児にとつては、生にくい時代であることはたしかであろう。ギリシャやエジプトの古

典的怪獣よりも、現代の怪獣は更に醜悪で、刺激的であり、その破壊力の規模も大きくなっている。現代には幼児の自然な心の成長を妨げ、精神的な歪みを生み出すような力が、幼児の身近な所に一層大きく動いているといえよう。それは私共自身の心の中にもあつて、幼児の心を歪める力としてはたらいっているのではないだろうか。幼児とふれるときに、自ら注意せねばならぬことであると思う。怪獣のことについては、もっといろいろと事例に当たり、文献を考察すると、新たに発見することも多いだろうと思うが、ここではこれで止める。

(つづく)

マーガレット・ミード著

女として人類学者として

和智 纓子 訳

平凡社

マーガレット・ミードは一九〇一年に

ている。

アメリカ東部のフィラデルフィアに生まれ、五〇年間にわたって活躍してきた女流人類学者である。ミードの父方の祖母は結婚後夫と共に大学に通ったし、母はミードを生む時博士論文を書いていたという、当時としては大変進んだ家庭に育った。彼女自身は、三度結婚して三度離婚するという数少ない女性の生き方をし

ミードのように女として自己に忠実な生涯を送ることのできる女性に対して、強い羨望を感じるとともに、現在の私たちがどう生きるかをも各行間から問いかけられているように感じる。

(山道 陵子)

\*

\*

\*